

句に純化しても良い。とすれば、「筆文字の地代台帳初蚊出づ」になる。

揚花火島の漁協の拡声器

守

父の日やバラ一輪の客来たり かおる

自句自解：大都会の花火大会と違い、地方のこじんまりした花火大会では、花火玉の提供者名を参加者にその都度告知する。たまたま遭遇した花火大会の土着性を言うために。「漁協の拡声器」を持ち出した。

鑑賞：「バラ一輪」を媒介として、父と客との関係性をあれこれ考えさせる。良い俳句は全部述べない。「バラ」は「薔薇」と漢字表記したいところであるが、敢えて片仮名表記することによって、前記の関係をサラッと云ったところが良い。

言ひ負けぬ男の舌や梅雨寒し

明美

山の音に混じる海の音枇杷熟る 明美

鑑賞：一旦公開された俳句は、鑑賞者によって作者の意図しない別の生命を吹き込まれる。単なる時事俳句(言い逃れの上手い前知事への風刺)ではなく、鑑賞者は、この句を女性対男性の問題として、普遍的に捉えた。

鑑賞：伝統的な俳句の作り方である。枇杷の木は、稲作や畑作に不適な斜面に植えられる。栽培には多大の労力を要する。
命日の厨に嘔きぬ豆の飯 友子

托鉢の二列十僧薔薇よぎる

朋子

鑑賞：上五の「命日の」と下五の「豆の飯」だけで句が成立している。こういう良い句では中七には、豆飯の周辺情報を適当に入れるだけで足りる。

鑑賞：この句は、托鉢僧と薔薇の取り合わせが鮮明な印象であることに加え、10人の托鉢僧が「二列十僧」に整然と列なしていると言ふことによつて、「托鉢」という仏道修行の本然の有り様を活写している。

妻嬉し三十本の薔薇の束 眞壽

初蚊出づ地代記載は祖父の文字 幸

薔薇の花束を貰えば、誰でも嬉しい。これを素直に句にするのは難しい。

鑑賞：作者の祖父は大地主か、その大番頭か。土地の所在と地代の額並びにその収納状況を示した台帳は、祖父の特徴ある文字で記されている。初蚊と地代台帳との取り合わせが巧みである。「祖父」に拘らず、旧家の蔵にあった地代台帳と初蚊の取り合わせの

断層の現れし大地へ梅雨出水 明美

鑑賞：時事を詠む俳句である。人間は産まれる地を選択できない。日本人の持っている諦観、宿命感は生まれつきなのか。それとも、後天的に植え付けられたものなのか。

縄跳のピシリピシリと早梅雨 朋子

鑑賞：ピシリピシリと地面を打つ縄の音が、早梅雨に良く響いている。「ピシリピシリ」にすることもできる。

雨道に睡蓮咲くやモネの庭 直子

添削：睡蓮や雨にけぶりし「モネの庭」

老鶯や石切り出して山尖る 朋子

添削：夏うぐひす石切りの山尖りをり原因と結果を結ぶ「て」の使用は、出来るだけ避けた方が良い。

甥継ぎし代田に映へる月の山 かおる

添削：甥継ぎし代田にかぶる月の山

亡き母の梅酒じんわり沁みにけり 友子

添削：遺されし梅酒じんわり沁みにけり別の言い方があれば、「亡き母」とか「亡き父」という常套的表現は使用しない方が良い。

私は私母の煮方の露料理 ヤエ子

添削：あくまでも母の煮方よ露料理

芝屋根をなびくべんべん草も夏至 朋子

添削：柴屋根夏べんべん草は根を張りぬ

要素が多いので「も」を使いたくなるが、これを使わないとすれば、上記のようになる。

献体の母を待ちゐる夏の雨 かおる

添削：献体の母もどる日や夏の雨

「を」は説明的なので、出来るだけ使わない。

翡翠を待つカメラマン動かざり ヤエ子

添削：カメラマンいま翡翠は化粧中

よく見る光景のため、句にするのは難しい。

公私無い都知事退職小判草 直子

添削：公私なき知事の辞職や小判草季語として小判草の選択が秀逸。

初孫の便りはずむや夏つばめ かおる

添削：初孫の便り届きし夏つばめ

夏の旅千代女の里に途中下車 幸

添削：夏つばめ千代女の里に途中下車

バラ一杯姫様気分馬路の湯 直子

添削：馬路の湯の薔薇一杯や眠りたし

老ひさきの身の振り方や明易し 友子

添削：末の子の留学先や明易し

老人と明易しとは、つき過ぎである。

葉を結わえ軒に玉葱乾しにけり ヤエ子

添削：軒下の玉葱時を数へけり

原句では、玉葱の干し方の単なる説明である。評者は以前、「軒下の玉葱死刑廃止論」という句を句集で発表したことがある。ここまで想を飛ばさなくても良いが、単なる見たままでは印象が薄い。

添削：父の日やかなの角栄の偶像化
角栄は土の下から今の慎太郎を笑っているかも。

梅雨の日の記念祭終へ校歌祭 直子

添削：記念祭終へ校歌祭早梅雨

さりげなき高齡の恋夏燃ゆる 眞壽

デコイチへ影や泰山木の花 朋子

鑑賞：鬱蒼と茂る泰山木の花影と D51 の黒

い外装とが、程良く合っている。

山陰し紫陽花に眉濡らしつつ 朋子

雨休み大木倒す駐車場 かおる

添削：喜雨休み大木伐りし駐車場

夏星の赤き近づく老の恋 かおる

山道の険しさが思い知らされる。

添削：やはり恋赤く近づく夏の星

片白草いづれの蝶も低く飛び 朋子

うちわ風撓りの軽さ猫眠り 幸

添削：朴の花いづれの蝶も低く飛び

添削：猫眠る軽き撓りの大団扇

伝統的な作り方の句である。蝶と草木との高低差をはつきり出したほうが良い。

暗い道呼ばれて見れば口なしか 直子

河川敷三歩のところに赤棟蛇 幸

添削：梔子の花に呼ばれし夜道かな

添削：バス停や三歩うしろに赤棟蛇

ガラス戸の守宮と目合う金縛り ヤエ子

河川敷に蛇がいるのは当たり前なので、意外な場所を探す。

添削：ガラス戸の裏の守宮や金縛り

父の日に天才角栄歴史化す 直子

百才の伯母に供へてさくらんぼ かおる

添削：百歳に逝きし伯母ありさくらんぼ

児の夢のくるくる変はる雲の峰 友子

汗ばみて寝る児へ祝詞宮参り 友子

添削：子の夢のくるくる変はる海月舞ふ
子供の夢は変幻自在。

添削：汗ばみて眠る子に降る祝詞賜かな

夏空や戦なき世を生きて喜寿 幸

ビルとビル紫陽花の咲く隙間あり 眞壽

添削：戦後とは次の戦前夏の空

添削：紫陽花の影を残してビル狭間

戦後七十年を題材とした類句は既に多々ある。人間は性懲りもなく戦争を繰り返す生き物。

ビルとビルの隙間は、簡略に言えば、ビル狭間。

梅雨晴れに香り漂よふ白き花 眞壽

もん白蝶離れ近づき上りゆく ヤエ子

添削：よく晴れて山家に百合のよく匂ふ

添削：梅雨蝶のつかず離れず上りゆく

梅雨晴れを消して白い花を具体的に言う。

外ツ国の娘浴衣似合ふ竹の道 ヤエ子

父の日やいだく赤子の大ききび 友子

添削：外国の人の浴衣や竹の道

添削：梅雨晴間胸の赤子の大ききび

雨の中高き芍薬咲きこぼれ 眞壽

父(父の日)と赤子を直接的に関係付けると、句の幅が狭くなる。

添削：高く咲き芍薬雨を喜びぬ

この土地に馴染まぬと決めサンガラス 明美

揚羽追ふ夢のつづきはお浄土に 明美

添削：どうしても馴染めぬ土地やサンガラス

添削：浄土へと夢追ひゆくや揚羽蝶

ス

俳句では「お」は出来るだけ使わない。

夏の蝶高み高みへ揺れ上る ヤエ子

ガーベラや花占ひの若き恋 友子

添削：夏蝶の上りし空を眩しめり

添削：ガーベラの花占ひや若き恋

恋は普通若き頃に経験するもの。偶然誤読

された「若き恋」が、正解。

(不在投句 古野明美
文責：代表 増田守)